

謎解き 超くわしいゴッホ 編

《オーヴェルの教会》 《自画像》

美術展などで必ず目にする作品のキャプション。そこにはタイトルや制作年、素材といった最小限の情報が記載されています。しかし、鑑賞者が作品と向き合う時、さまざまな入口があっていいはず。来夏の謎解き「ゴッホと文化財」展では、美術作品がはらむ重層的な問いを並べ上げることで、作品への興味と理解を深め、多面的な見方を提案する「超詳しい美術展示」を行う予定です。

作品を鑑賞する時、皆さんは何を見ているのでしょうか？心動かされる作品に出会った時、「何」に感動しているのでしょうか？東京藝術大学では、クローン文化財・スーパクローン文化財を活用して、人は何に感動するのかについて、研究を続けています。

企画予定

■ 教会を立体化してみたら・・・。

ゴッホは、フランスに実在する「オーヴェルの教会」をモデルにして絵を描きました。教会に対し、ひとつの視点を選び、そこから見える姿を描いているため、教会の裏側は描かれていません。そこで、実在の教会を参考にしながら、教会の全体を立体化してみました。ゴッホは、実際の教会のかたちを全体的には忠実に捉えていますが、絵画としての構図の魅力を高めるために細部を変形させて描いています。教会の立体化モデルでは、絵に描かれた部分はゴッホが描いたとおりに変形させ、描かれていない部分は実在の教会のかたちを簡略化して再現しています。いろいろな角度から眺め、ゴッホが絵作りのために行った工夫と、その効果を考えてみましょう。

■ なぜゴッホはそのように描いたの？

ゴッホの特徴的な技法に色をあまり混色せずに塗っていく筆触分割というものがあります。またダイナミックな筆のタッチはゴッホの絵画を生き生きとさせています。東京藝術大学の研究員が、ゴッホの特徴的な技法を使わず《オーヴェルの教会》を描いたら、どう見えるのか？それぞれの絵から何を感じるのでしょうか？そこからゴッホのタッチや色彩の秘密がわかるかもしれません。

■ 実物写真と比べてみたら・・・。

オーヴェルの教会という絵の題名ですが、フランス パリ北西のイル・ド・フランス地域圏のオーヴェル＝シュル＝オワーズ村にあるノートルダム教会という建物です。この教会は12世紀から13世紀に建てられました。写真と絵では何が違うか比べてみましょう。

■ 共通点を探してみよう _ ゴッホ《自画像》と《オーヴェルの教会》

この自画像は1889年9月に描かれ、オリジナルはフランスのオルセー美術館に所蔵されています。ゴッホは生涯で37点の自画像を描いています。そして《オーヴェルの教会》は翌年1890年に描かれました。二つの絵から、共通点を見つけることはできるのでしょうか？